

麗華と上野

2

金言で成長 恩返し誓う

上野由岐子(34)にとって、現役時代の宇津木麗華(53)は近寄りがたい大先輩だった。20歳近く離れ、チームでも代表でも主砲を担う大ベテランに、特別な思いを持つことはなかった。「私も若くて、いっぱいいっぱいだった。麗華さんのすごさはよく分からなかった」と言う。

距離が近づいたのは2003年、麗華が日立&ルネサス高崎(現ビックカメラ高崎)の監督に就いてからだ。細部にまでこだわる高い技術と試合を読み切る戦術眼、そして切れ味鋭い勝負勘を再三見せられた。「こんな先のことまで考えているんだ。こんなことまで考えて采配しているんだ」。まなざしは尊敬に変わり、「この人についていけば間違いない」とまで思うようになった。



①ソフトボールの五輪復帰に向けて、取材に応じる上野(右)と麗華(2013年5月、高崎市) ②北京五輪で優勝し、金メダルを掲げる上野(左から3人目)。麗華にささげた金メダルでもあった(2008年8月)



世界一の道も、共に歩んだ。麗華が2度挑み、届かなかった五輪の金メダル。麗華は08年の北京大会へ向けて秘策を授け、新しい球種を学ばせるために米国に連れて行った。重圧に押しつぶされそうになっていた上野に、一筋の光をもたらした。米

は「金メダルを麗華さんの首にかけた」と感謝の気持ちを大声で伝えた。北京が終わると、上野はどん底に落ちた。人前に立つのが嫌いなのに、自分だけに取材は殺到し、英雄に祭り上げられた。「何で(日立つ)投手なんかやっているんだろう」。子供に携

帯で写真を撮られるのすら、ストレスで顔を背けた。五輪という最大の目標も失い、ライバルも見つからなかった。「やりた」という感情の日と、もうやりたくないという感情の日が毎日、いやー時間ごとに入れ替わっているくらい荒れていた。気持ちの整理はいつまでもつか

なかった。そんな時、麗華から一つの言葉を贈られた。「これからはソフトボールに恩返しをするつもりでやってみたら」。今まではうまくならない、五輪で優勝したいという一心だった。それがなくなった時にかげられた一言は、不思議と胸に刺さった。

「麗華監督」に恩返しすると思って頑張ろう。監督が「上野頑張ったね」と言ってくれるくらいに。そうやってやめられたら、最高だなんて思えた。気持ち徐徐にマウンドへ向かい出した。

麗華監督、エース・上野のコンビでチームは何度も日本一になった。麗華が日本代表監督として指揮を執った12年の世界選手権では42年ぶりの優勝を果たし、14年には連覇を達成した。マウンドにはもちろん上野が立っていた。「麗華さんに出会えたから今がある」。その思いは、今も強く持ち続けている。(敬称略)

麗華と 上野

3

人間力磨け 妙子の教え



29人の選手が昨年12月13日、東京都内の味の素ナショナルトレーニングセンターに集められた。2020年東京五輪に向けた新生日本代表の船出。上野由岐子(34)らの前で、新監督の宇津木麗華(53)

は「知らない人にもあいさつをしよう。人と話す時は目を見よう」と訴えた。そのことを伝え聞いた日本ソフトボール協会副会長の宇津木妙子(63)は「これなら大丈夫」と胸をなで下ろした。

上野の恩師が麗華ならば、麗華の恩師は妙子だ。麗華は妙子に憧れて、中国から帰化。名字は妙子からもらった。日本人としての立ち振る舞いから厳しく教えられ、妙子が指

揮を執った2度の五輪では日本の主砲を担った。04年アテネ五輪の前年に、妙子から日立&ルネサス高崎(現ビックカメラ高崎)の監督を引き継ぎ、妙子は裏から支えた。「日本の母」と言っべき存在だ。

昨秋、妙子は麗華から、東京五輪に向けた日本代表監督に立候補することを聞かされた。「本当に覚悟はできているのか。代表監督の重さは分かっているのか」と問いつづけた。麗華の監督としての実力に

疑いはない。妙子も「あそこまで考えて分析できる女性には、彼女しかいない」と高く評価する。でも五輪監督となれば話は違う。きらびやかな舞台の裏には、底知れない重

圧と全てを失うリスクが潜む。ましてや自国・東京での開催。「これまでとはかかる期待が段違い」(妙子)だ。難しさは想像できるだけに、「やってほしい反面、繊

細なところもあるから心配だった」。親心を見せる妙子を見て、麗華は「金メダルの自信がある」と説き伏せて出馬した。選考を勝ち抜き、代表監督に就いた。

麗華の指導は、もちろん妙子仕込みだ。チームの監督になった当初、「今の子は怒ってはダメ。自由にやらせて責任を持たせる」と妙子に伝えた。厳しく教える妙子流の否定——。でも1、2年すると、変わった。

るようになった。それはエースの上野も例外ではない。上野は「たまに細かいことで反発したが、ずっと近くで見守ってくれた」と感謝する。

15年、チームが半導体大手のルネサスエレクトロニクスから家電量販店大手のビックカメラに移管されたように、実業団チームの存続は会社の業績に大きく左右される。ソフトボールの成績に関係なく、だ。そんな悲哀を多く経験してきた妙子は、「結果が出ない時にも愛される存在にならないといけない」と強く思う。

その考えは麗華にも受け継がれている。代表監督就任の場で、「最後にものをいうのは人間力。選手一人一人が、あるいはチームとしてみんなに愛され、心から応援してもらえるチームにしたい」と強調した。妙子は麗華の成長を

世界選手権で2連覇を果たし、帰国した上野(中央)、監督の麗華(右端)。左端は団長を務めた宇津木妙子(2014年8月26日、成田空港)

「やっぱり、周りに応援されるような人間を作らないとダメだね」。妙子と同じように、口うるさく選手を注意す

(敬称略)

麗華と 上野

4

宇津木麗華(33)と上野由岐子(34)。2人の関係について、元女子日本代表監督の宇津木妙子(63)は「私と麗華の関係と、すごくよく似ている」と言う。

妙子が監督として2004年アテネ五輪に挑んだ時、麗華は41歳だった。肩や膝を痛め、体はぼろぼろ。それでも「妙子さんを最後まで支えろ」と決めていた。シドニー五輪後に妙子さんの続投が決まった時、私も腹を決めた」。アテネでは主将を務め、銅メダル獲得に貢献した。

東京五輪が開かれる20年、上野は38歳になる。左膝に爆弾を抱え、3年後の状態は本人にも分からない。妙子は「上野は最後、麗華の下でやりたいのだ」と思う。覚悟はできているはず」と、以前の麗華の姿に重ねる。

目線下げ「孤高」脱皮へ



麗華の解説に合わせ、子供たちに投球フォームを披露する上野(2009年11月、福島市で)

のがあるんだと思う」と推察する。

2人だけが分かり合える世界。若手には簡単に近づけない領域だ。34歳の今でも飛び抜けた実力を持ち、圧倒的な経験と実績を誇る上野。「現役時代の麗華さんと同じような存在になってしまった」と苦笑いする。

ビックカメラ高崎のシニアアドバイザーを務める妙子は試合中、ベンチ裏で上野と会話を交わす。試合の流れや配球、たまには愚痴も聞く。エースの孤独を和らげようと、心を砕く。

でも、このままでいいとは思わない。「大先輩でも選手。『上野さんが投げれば大丈夫』ではなく、『上野さんを守ってあげよう』と思われたいといけない」。上野には、「変わらな

かない」と伝えていた。代表でも同様だ。現在、五輪経験者は上野と山田恵里(32)(日立)の2人だけ。上野は「リーダーシップをとって、チームでも代表でも一つになる手助けをしたい」と語る。そのためには、若手との信頼関係が不可欠だ。

15年にチームの所属がビックカメラに代わった。新会社は客商売。何を言われても、笑顔で対応する社員の姿を見て、上野はこう思うようになった。

「挫折を知らないでちやほやされてきたから、テングになっていたことがあるかもしれない。でも今は、理不尽なことで頭を下げられる選手になることを求められている気がする。それができれば、もう一つ上につながると思う」

妙子が麗華に伝えてきた「人間として一流でないと、スポーツで一流になれない」という教え。孤高の存在から脱皮を目指す上野にも、しっかりと引き継がれている。

(敬称略)

有美(37)も、上野と麗華を長年見てきた。ことある度に、2人だけで高い技術論を交わしている。人には見えない発見みたいなものがある。

麗華と上野



5 最終回

互いを信頼 五輪「連覇」へ

まだ試合中だというのに、宇津木麗華(53)はベンチで上野由岐子(34)の隣に座り、話し続けた。昨年11月の日本リーグ決勝トーナメント初戦。上野が四回までに6点を奪われ、マウンドを降りた。味方の攻撃が終わりの次のイニングになっても、2人だけの会話は続いた。

驚異的な勝率と防御率を誇る上野。決勝トーナメントで6失点するのは、「1年目以来だと思っ」(上野)。そんな時だからこそ、麗華は屈く言葉があると考えた。「この1時間が勝負だ」。配球や心構え、投球術、マウンドとの相性。様々なことを伝えた。試合は4-7で敗れ、麗華のビックカメラ高崎での最後の指揮となった。

麗華が上野にほれ込む理由は、日本人最速を誇る剛速球に加え、国際レベルの投球術を持つからだ。世界のストライクゾーンは外角に広い。日本のゾーンで勝負すれば、腕が長くパワーのある外国人打者に、悠々とフェンスを越される。でも上野は国際標準に合わせた投球がで

きる。麗華は世界で見ないと上野の良さは分からない。上野を超える投手も育てたいけど、現状で2020年の東京五輪は上野しか考えられないと言っ。

上野はこれまで、「東京を目指すか決めていない。気持ちが動くのを待ちたい」と、身の振り方を明言してこなかった。自分がやらなくてはいけないことは分かっている。だが世界一に向けた苦しい道のりを、再び進む覚悟はつかなかった。昨年8月、ソフトボールが東京五輪で正式種目に復帰することが決まっても、整理はできないままだった。

気持ちを動かしたのは、やはり麗華だった。昨秋、麗華の代表監督就任が決まると、迷いは自然と消えた。「麗華さんの力になりたい。やらなくちゃ」という気持ちになった。あんなにごまかしていたのに」。苦笑

いの中にも、喜びがこぼれ。08年北京五輪を制した日本は、前回王者として東京五輪に臨む。世間の注目は、これまで以上に自分に集中するだろう。不安はあるが、上野は言っ。「もう大丈夫。麗華監督は全て分かってくれているから。常に麗華さんの右腕でいられるような選手でいたい」。麗華も「気持ちがあまり抑えるところ半つらくなる。プレッシャーは全部背負うから、のびのびとやってほしい」と応える。



麗華(左端)とそれを聞く上野(手前) (昨年12月、沖縄県) 日本ソフトボール協会提供

17年シーズンを迎え、上野は「東京を見据えてスタートしたい」と気持ちを新たにす。左膝にはサポーターが巻かれたまま。でも、「信頼」を一番心意気に感じる上野にとって、麗華の役に立つことが全てだ。

「麗華監督と以心伝心でいたい」。高崎で育んだ師弟のきずな。二人三脚の最終章へ、13年越しの五輪連覇を目指す歩みが始まった。

(敬称略、この連載は星聡が担当しました)